

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	第 16 回イタリア分析哲学会への現地参加と研究発表
氏名 Name	高木博登
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	文学研究科・倫理学・博士後期課程 3 年
渡航国 Country	イタリア
渡航日程 Travel schedule	2025 年 8 月 26 日 ~ 2025 年 8 月 31 日

- ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- 写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- 各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- 日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

2025 年 8 月 27 日から 30 日にかけて、イタリアはトリノ大学で第 15 回イタリア分析哲学会が開催された。イタリア分析哲学会はイタリア分析哲学協会によって 2 年に一回の頻度で主催されている。周辺国との地理的・政治的事情も相まって、イタリアだけではなくヨーロッパ全土から分析哲学に従事する哲学者たちが集まる。今回の渡航では“A Reinterpretation of Putnam’s Idealized Rational Acceptability Theory of Truth”（「パトナムの真理の理想化された合理的受容可能性説の再解釈」）という題目で口頭発表を行うことを目的とした。

成果 Outcome

発表時間は質疑応答を含めて 30 分であった。この時間枠は哲学史に関する研究発表として短い部類に入るものの（申請者がこれまで経験した研究発表のなかでも一番短い）、それを見越して発表スライドを作成し、発表の予行練習を行ったため、質疑に 10 分程度残すように発表することができた。質疑においては、発表者が見通していた点や、発表を論文化する際に言及しておくべき点などについて有意義な指摘がなされた。また、申請者の発表内容についてそういった有意義な指摘をもらえただけではなく、(1) 申請者の研究内容が海外の研究者にも関心を持ってもらえるものであること、(2) 研究発表を英語で（なんとか）こなすことができる、という手ごたえもまた、本渡航で得られた成果だと言ってよいだろう。

また、専門を同じくする研究者と交流することができたことも大きな収穫であった。申請者の発表のオーディエンスの中には、申請者と同じくヒラリー・パトナム研究を専門とするサッカリ大学の Massimo Dell’Utri 教授もおり、発表終了後には発表内容のみならず、申請者の今後の博士論文に向けたプロジェクトについて相談することもでき非常に有益だったと感じている。

今後の展望 *Prospects for the future*

今回の発表で得た質問や議論を踏まえつつ、発表内容をブラッシュアップし、近日中に国際誌に投稿する予定である。また、今後も引き続き海外での研究発表を行うことによって、申請者の研究を国際的に発信することに務めたい。さらに、今回の渡航でつながりを得た研究者と共同研究や訪問研究、あるいはポスドク研究員としての就職するといったかたちで活用できればとも考えている。